

浮気した婚約者が見えなくなったら、  
快適すぎる毎日になりました



ディーン・  
ウイスタリア

ウイスタリア家の長男。  
一見淡泊だが家族思い。

イーサン・  
バーミリオン

カーラー王国の王弟。  
王族らしい端正な容姿で、  
誠実かつ穏やかな人柄。

デューク・  
ウイスタリア

ウイスタリア家の次男。  
王宮魔法師。

マドリーン・  
セラドーン

ニーナと同じ  
学園に通う侯爵令嬢。  
ツンデレ。

カレン・  
アンバー

チャイロ男爵領を治める  
アンバー家の令嬢。  
鮮烈な美人。

バーニー・  
スプルース

グリーン侯爵領を治める  
スプルース家の長男。  
ニーナの婚約者。

ニーナ・  
ウイスタリア

フジーロ侯爵領を治める  
ウイスタリア家の令嬢。  
おっとりしていて真面目な性格。

## 目次

浮気した婚約者が見えなくなったら、  
快適すぎる毎日になりました

7

番外編 しあわせのいろ

247

浮気した婚約者が見えなくなったら、  
快適すぎる毎日になりました

## 第一章 消えていく日々

恋をしていた。

貴族であるから婚姻は家同士の政略によるところが大きいけれども、それでも婚約相手のことを愛していた。愛してしまっていた。

「い、今なんと、おっしやいましたの……?」

声が震えるのを止められなかった。指先からスーツと冷たくなった手が震えて、うまく息ができない。溺れるように息を継ぐ無様な私を、正面に座る婚約者は冷めた目で眺めていた。まるで景色でも眺めているかのような、無機質な視線で。

「婚約を解消しようと言ったんだ、ニーナ」

やはり聞き間違いなどではなかった。であれば、この態度にも納得できる。婚約者のバーニーには、私を愛する気持ちなど欠片もなかったということだ。

愛されていないかもしれないという予感、不吉な影のようにずっと私に付き纏っていた。けれど私はそれから目を背け続けてきた。結婚をしたら、子をなしたら、いつか愛が芽生えるのではないかという希望に縋っていたのだ。私、ニーナ・ウイスタリアは、婚約者であるバーニー・スプ

ルースを愛していたから。

どうしてこうなったのだろうか?

学園が休日の今日。なかなか二人の時間を取れずにいた婚約者が訪ねてくるとあって、私は朝から幸せだった。

久しぶりにウイスタリア家にやって来たバーニーは変わらず儀礼的に、けれども礼儀正しく、私の向かいに座ってお茶に口をつけ、そして。

そして、まるでこの先に待っている二人の結婚について話し合うかのような調子で、あり得ない未来を告げたのだ。「婚約を解消してほしい」と。

「なぜ……? なぜなんです?」

どうにか飲み込んだ涙で喉を震わせる私に、バーニーが気まずそうに目を逸らした。その表情の変化を見て、わずかな感情の動きに希望を見出してしまふ。まだ情けがあるのなら縋りたい。恋に溺れる私はなんて浅ましいのだろう。

「愛する人ができたんだ」

「私以外に、ですか?」

「当然だ。君が相手なら、こんなことを言い出しはしないだろう」

バーニーに恋する私は、彼が愛する人ができたと告げた瞬間に、ほころぶように見せた表情の意味がよくわかってしまった。恋をする人間の顔だ。私はこの顔をよく知っている。鏡の前で、彼のために化粧をする私と同じ顔だったから。

バーニーの恋心は私以外の誰かに向けられている。家によって定められた婚約を続けられないほどに、激しい感情で。

「——っ！ ニーナ、何を……！」

「考え直してくださいませ！」

繋ぎ止めるのは無理だとわかっていても、はいそうですかと引くこともできなかった。気が付けば私は、テーブルを回り込んでバーニーに縋り付いていた。

「離してくれ！」

腕を振り払われて、無様に床に崩れ落ちる。それでもなおバーニーへと手を伸ばした。けれど私の指先が彼の膝に触れる前に、バーニーは立ち上がってしまった。私は縋るものを失い、床に両手を突いて這いつくばった。見上げた婚約者の顔は、凍てつくような冷たさを滲ませていた。

「とても淑女の振る舞いではないよ、ニーナ」

眉をひそめてバーニーが言い捨てる。彼の言う通りだ。けどとなりふり構わず縋って繋ぎ止められるのなら、どんなにみつともなくたって構わないと思った。

「諦めてくれ。正式な申し出は後日スプルーース家から送るよ」

捨て身の願いも虚しく、バーニーは扉を開けて出て行った。惨めに床にうずくまる私を置いて、振り返ることもなく。

「あ、うっ、ううっ……」

涙が止めどなく溢れて、頬を、床を濡らしていく。侍女やメイドに支えられてどうにか立ち上が



り寝室へと向かう間も、ベッドに横たえられる間も涙は止まらない。

その日、私は眠ることもできず泣き続けた。

バーニー・スプルスと私はともに学園に通う十七歳で、いわゆる政略による婚約だった。

鍛冶を主な産業とするスプルス家と、王国最大の騎士団を有するウイスタリア家。ウイスタリアはスプルスから質の良い武器を手に入れることができ、スプルスはウイスタリアという得意先があることで産業が安定する。領地が隣接していることもあり、両家は互いに利のある関係を続けてきた。

スプルス家が侯爵に陞爵してからは家格的にも釣り合いの取れた関係となった。祝福された歴史の中で、私たちは何ひとつ曇りのない婚約を交わしたのだ。

婚約していた期間は三年間。学園に入る前にはもう正式に婚約していた私たちは、卒業を待つて結婚する予定だった。卒業までは残り二年足らず。あとほんのわずか先の未来で、私はバーニーと夫婦になれるはずだった。

けれど、愛する人と結婚するという、すぐそこにあつた未来の夢は、この日、呆気なく消えたのだ。

それからの数日間のことは、ぼんやりとしか思い出せない。

ただずっと、ブランケットの中で丸くなって泣いていた。食事を拒否して、会話を拒否して、悲しみの中に閉じこもった。そんな私を心配して、家族が様子を見に来てくれたことだけは何となく

覚えている。それだけだ。



ニーナがそうしてすべてを拒んでいる間、ウイスタリア家の食卓には重苦しい空気が充満していた。

「それで、ニーナはまだ……」

「部屋にこもったままですわ、あなた」

当主であるフジ一口侯爵は妻の言葉に眉間の皺を深め、侯爵夫人ローナは娘を想つてため息を漏らした。

長兄ディーンは一見して淡々と食事を進めているようでありながら、その手元ではメインディッシュの仔牛が細かく細かく切り刻まれている。

「バーニーの野郎は最低だ」

切り刻むものがなくなつたディーンが手を止め、耐えかねたようにポソリと呟く。

「ええそうね、私も同じ気持ちだわ、ディーン」

「スプルス家の馬鹿息子には相応の報いがあるだろう」

夫人が息子の言葉に同意を示し、侯爵もまた、妻に追従して怒りを吐き出した。

ニーナはウイスタリア家を明るく照らす灯火だった。周囲から愛されてまっすぐに育つた娘は、

いつもその笑顔で家族の心を和ませていたのだ。

ニーナの笑い声が消えた夕食の席には痛ましく寒々しい空気がかりが流れていた。



どれくらい時間が過ぎたのだろう。

泣き疲れて気絶するように眠りに落ちて、悪夢を見て飛び起きて、現実を見てまた泣いて。まだ数時間しか経っていないような気もするし、幾度かの朝と夜が過ぎた気もする。時間も意識も曖昧で、ただひとつ確かなことは愛する婚約者から別れを告げられたということだ。

バーニーと結婚する。それ以外の未来など思いもしなかった。失恋の衝撃で考えることを放棄していたが、悲しみの向こう側に見え隠れする貴族令嬢としての未来は暗い。傷付いた世間体を思えば、一周回って冷静になれそうなほど状況は良くない。この先に待ち受けている暗闇に思考が触れて、ため息が出た。と、同時に、とつくに枯れ果てたと思っていた涙がまた流れ落ちる。

ベッドの上でぼんやり泣いていると、部屋のドアがノックされた。

「お嬢様、セラドーン家のマドリン様からお見舞いのお花が届いております」

「お見舞い？」

侍女の声に首を傾げる。

「はい。お嬢様は今、学園をお休みしているので……」

説明をどこか遠くに聞きながら、入室を許可する。礼をして入って来た侍女の手の中で鮮やかな花たちが揺れていた。綺麗だなと思いつつ、何かを綺麗だと感じる感情が湧くことに驚く。ひとしきり泣いたことで、少しは気持ちが変わっているのかもしれない。

「マドリン様はもう帰られたの？」

「いいえ。お茶をお出しして、奥様がお相手を」

「そう……」

マドリン・セラドーンは同じ学園に通う令嬢だ。同じ歳、そして同じ侯爵令嬢ということで、何かと私をライバル視していた彼女だが、どういう風の吹き回しで見舞いに来たのだろうか。もしかして、学園ではすでに私とバーニーの婚約解消が話題になっているのかもしれない。それで、同情して？

考えてもわからなかった。だが、これは学園でのバーニーの様子を知ることができる、数少ない機会だ。バーニーが言っていたスプルス家からの正式な申し出がもう届いているのかは不明だが、彼の様子から、学園で公に宣言していてもおかしくない。

「マドリン様にお会いするわ。支度して」

「お嬢様……!」

立ち上がって伝えると、侍女の顔が驚きと喜びと心配と、複雑に絡み合った表情に変わった。こんなポロポロの状態で人と会えるのかどうかかわからないけれど、バーニーの様子がわかるなら、何でもいから聞きたかった。私を捨てて彼は少しでも心を痛めているのか、それとも素知らぬ顔を

しているのか。

それを聞いてさらに傷付くことになるとしても、現状を知りたいと思った。そしてできればバーニーにも傷付いてほしいとも。私は浅ましい、どこまでも。

「マドリン様、お母様」

応接室の入り口に立ち、向かい合ってソファに座る二人に声を掛けた。数日ぶりに姿を見せた娘に、母が目を丸くして立ち上がる。マドリン様もまた驚いたように顔を上げた。

母から私のことをどこまで聞いたのだろうか。そして学園では、私とバーニーについてどこまで噂になっているのだろう。

「お花をありがとうございます、マドリン様」

随分ときこない自覚はあるものの、どうにか口角を引き上げて微笑みらしき表情を作る。淑女たるもの、どんなときでも優雅に微笑むべしと叩き込まれたというのに情けない。でもこれが今の私の限界だった。

「体調はもう、よろしいの？」

こちらを探るような気配を滲ませつつ、表面上は取り澄ましてマドリン様が訊ねる。

「ええ、仮病ですもの」

取り繕う余裕を放棄した私の答えに、今度こそマドリン様のはっきりと動揺を示した。

「お母様」

呼び掛ければ、成り行きを見守っていた母がハツとして私を見る。

「少し、マドリン様と二人にしてくださいますか？」

「——わかったわ」

母にしてみれば数日ぶりに娘の顔が見られたところだ。その胸中には聞きたいことも掛けた言葉も溢れているに違いない。けれど、それをのみ込んで立ち上がる。

部屋を出て行く母を見届けてソファに腰を下ろすと、マドリン様と私に新しい紅茶が運ばれてきた。

カップに口をつけゆつくりと数日ぶりの香りを味わう。味も匂いもちゃんと感じる、それがなんだか不思議だった。死人にでもなったような気でいたのに、ちゃっかり生きのびてしまったような心境だ。

「母から聞きました？」

言葉を探しているような、どこか寄る辺ない顔をしたマドリン様にこちらから話を向ける。彼女はきゅっと表情を引き締めて、首を横に振った。

「夫人からは体調を崩されたとしか伺っていませんわ」

「そうですね。——でも本当は、そうではありませんの」

どうやら我が家はまだ対外的に事情を明らかにしていないらしい。母の気遣いだと思うが、私にはもう隠す気はなかった。こちらが手の内を明かさなければ情報は得られないから。恥を晒しても、バーニーに繋がる情報があるのなら知りたい。

私の気持ちが伝わったのか、マドリン様はゆつくりとひとつ頷いた。

「先程、夫人には言えませんでしたけど……学園では噂になっておりますわ」

「噂、とはどのような？」

紅茶の揺れるカップに視線を落としして訊ねる。

「スプーン家の愚かな子息がニーナ様に婚約の解消を持ち掛けたと」

些かきつい言い方に驚いて顔を上げれば、マドリン様が見たこともないほど怖い顔をしていて、さらに驚く。

「ニーナ様の評価には何の影響もありませんわよ。どちらが不誠実だったのかなんて、あまりにも明白ですもの。私も耳を疑いましたわ」

フン、と息を吐いて、マドリン様が刺々しい言葉を重ねる。

「だって、理解ができませんもの！ 軽々しく婚約を解消するなんて一体、何を考えているのか！ 理解する必要もないことですけど……でも、腹立たしいことだわ」

私は彼女から、あまり良く思われていないのだと思いついていた。だが今の彼女はまるで、私のために怒っているように見える。

「マドリン様……」

意外な出来事を前に固まってしまった私の様子にはととして、マドリン様は唇を尖らせる。いつもの、私に突っかかってくる彼女らしい表情だ。

「な、情けない顔はやめなさいな！ あんな男、ニーナ様が捨てたと思えばよろしいじゃないの！」

頬をうつすら赤く染めてマドリン様が捲し立てる。

「これから先、苦勞するのはあちらですわよ！ ニーナ様。あなたが弱っているのでは、相手をつけあがらせるだけですわ。ま、まあ、無理をすることはいけませんけど！」

勇気づけるような、それでいて心配をするような言葉が並ぶ。ツンとした表情とのギャップがすごい。私は思わず、バーニーについてあれこれ聞くのを忘れてぼろりと呟いた。

「私……マドリン様に嫌われていると思っていましたわ」

その言葉を聞いた瞬間にマドリン様の頬がますます赤くなる。吊り上がった目が困ったように泳ぐのを隠しきれていない。

「べ、別に嫌っていませんわよ！ わ、私はただ美しさでも気品でも、私と唯一対等なのがニーナ様だと思って……」

いつもはつきりと物を言うマドリン様もごもごと語尾を濁す。もしかして、もしかしてだけど、何かと突っかかって来ていたのは、ただ彼女なりのコミュニケーションだったのだろうか。ツンと澄ましているマドリン様が、急にかわいく見えてきた。

「マドリン様」

改めて目の前の令嬢の名を呼ぶ。しっかりと目を合わせると、困ったように眉が下がった。初めて見る表情だった。

「ありがとうございます」

取り繕った社交辞令ではなく、心からの言葉が自然に出た。唇がほころんでいるのが自分でも

かる。まだ笑顔とも呼べないような顔かもしれないけれど、先程までのぎこちなさは消えていた。

「な、何のお礼ですのっ？」

マドリン様の目尻がキュッと吊り上がる。ほんのりと頬を染めたその表情は、やはりとてもかわいと感じた。



「このたびは愚息が、大変申し訳ございません」

二日後、ウイスタリア家を訪れたバーニーの父親グリーン侯爵は、そう言って深々と頭を下げたらしい。しかし、息子のバーニーを連れて我が家へ謝罪に来た彼と、私が顔を合わせることはなかった。私はその日、朝から出掛けていたからだ。

王宮勤めをしている二番目の兄が急に実家へと戻って来たのは、マドリン嬢が訪問した翌日だった。両親から私の婚約解消を聞いてのことだと言うが、そこまで心配をしてくれたことが意外だった。兄たち二人はとても優しいけれど、感情的に動くことはないと思っていたから。

「ニーナ、明日はピクニックだから支度して」

二番目の兄、デューク兄さまは私の部屋を訪れると唐突に言う。

「ピクニック、ですか……？」

「そう。ニーナがこもってメソメソしてるから部屋がカビ臭いつたらありやしない。換気換気！」  
口調はひどく乱暴だが、ズカズカと部屋に入ってきて来て窓を開ける兄の声はとても柔らかかった。

私も、悪態の裏側にある心配を見抜けないほど薄情な人間に育ったつもりはない。母や父、それ以上の兄からはしょっちゅう「デリカシーがない」と咎められている残念な次男だが、今はその強引さが眩しかった。

全開になった窓から光が差し込む。デューク兄さまの銀糸のような髪がキラキラと陽に透けて、思わず眩いていた。

「きれい」

兄はきよとんとこちらを見ていたが、私の視線を辿って髪のことだと気付いて苦笑する。

「お前も同じ色だよ」

銀の髪に、藤色の瞳。家族の中でこの色彩なのは私とデューク兄さまだけだ。父フジーロ侯爵は黒髪に藤色の瞳、母ローナは銀の髪に青色の瞳で、長兄のデインは黒髪に空色の瞳だ。

そうして、些か強引な兄デュークに連れられ湖畔の別荘に出掛けた後、スプルス家の父子が我が家を訪れたらしい。

来訪のことを事前に聞かされなくて良かったと思う。彼らの訪問を知らされていたら、私はバーニーに一目会いたいと願っていただろう。グリーン侯爵にも、どうかバーニーを説得してくれと縋ってしまっただかもしれない。私の矜持は、家族の愛によって守られた。

私とデューク兄さまが訪れたのは、ウイスタリア家が領地に所有する別荘だった。

今は別荘となっている屋敷が建つ湖畔は、ウイスタリア家の始まりの地だ。湖のほとりの小さな土地が王家から与えられた最初の領地で、精霊と契約を交わした地だと言われている。もちろんそれは半分御伽噺おとぎばなしとして語られているものだが、ここカーラー王国に精霊信仰が根付いているのは事実だ。

貴族としての家名を名乗るには、まず王国から領地を賜ること。そしてその地に住む精霊と契約を交わすことが必要なのだという。

「とつと忘れちゃいなよ、あんなクズ」

陽当たりの良いテラスで、デューク兄さまと並んで湖を眺める。華やかな香りのお茶で口を潤した兄がさらりと暴言を吐いた。

「クズ……」

マドリー嬢と言い、デューク兄さまと言い、意外にも過激派で驚く。

「だいたいさあ、もどから気に食わなかったんだよね、アイツ。表向きは愛想よくしててもニーナのこと全然見てなかったじゃん？」

兄の言葉は真実だ。胸がズキリと痛む。バーニーは私を愛していなかった。それを再認識して傷付く私の顔を見て、兄がため息をついた。

「見る目ないね、おまえも」

「ええ。ほんと……に……」

呟いて、また、ぼろりと涙が溢こぼれた。兄は何も言わない。ただ黙って私の髪を撫で、嫌味なほど長い脚をゆったりと組み替えて、黙って湖を眺めた。たふりと、たふりと、のどかな日差しを浴びて水面が揺れる。この湖がいつぱいになるほど泣いたら、この恋心も消えるのだろうか。

見る目がなかった、それはそうかもしれない。でも、バーニーはちゃんと優しくかったのだ。ただ私を好きにならなかっただけ。

初めて顔を合わせた日を思い出す。ウイスタリア家の応接室で、向かいに座った少年は緊張で頬を薔薇色に染めていた。栗色の髪に深緑の瞳。森林のように穏やかな色彩を持つ婚約者だった。

出掛けるときにはエスコートをしてくれて、誕生日には贈り物をしてくれた。バーニーの紳士的な振る舞いと儀礼的な優しさを、私は愛した。それが彼の美点だと思っていたからだ。

ただ、緑の瞳はいつも私ではない誰かを探していた。政略であてがわれた婚約者は恋情を捧げる相手ではないと、そう頑なに決めているように、私に心を開くことはなかった。

「ニーナはさあ、恋に振り回されんのは仕方ないことだと思ってるだろ。自分じゃどうしようもないってさ」

「それは、はい……」

唐突に当たり前のことを問われて、肯定しながらも戸惑う。わざわざ確認することだろうか。

自分のことも相手のことも、人の気持ちはどうにもできない。だからバーニーは婚約者である私以外の人に恋をしてしまったのだし、バーニーに恋をする私はいつかその気持ちは変わることを

願ったのだ。私が今、失った恋に為すすべもなく傷付いていることも同じ。

「ただデューク兄さまはそれを否定する。」

「俺はそうは思わない。感情なんて曖昧なもの、自分のコントロールできないところに勝手に生えてくるなんてさあ、そんなわけないじゃん」

デューク兄さまは椅子に体を預けて背をそらすと、空中にぽんと放り投げるように言葉を吐いた。昔から恋やらロマンやらに決して憧れない兄さまらしい台詞だ。

「ニーナ」

空を見上げていた兄さまがテーブルに肘をついて私のほうに身を乗り出した。長い人差し指が私の額にそっと触れる。

「ここに心がある。自分の頭でちゃんと決めてるんだよ、人間は」

「自分で、決めてる？」

「そ。ニーナはさ、婚約者と言われた男のことを、ちゃんと好きになるって決めただ。奴はその逆だった。おまえに恋をしないと決めた、自分で」

だからこの先もバーニーは決して手に入らない。彼自身が決めたことだから。兄が告げたことはとても残酷で、だけどその残酷さは今の私に必要なものだった。バーニーのいない未来は変えようがないのだと諦めることで、ようやくそれ以外の未来を手にとることができるのかもしれない、ぼんやりと思う。

「だから今度も決めればいい。いつか好きじゃなくなる日を待つんじゃない、今日からちよつと

ずつ恋を捨てていくんだと、自分の意志でそう決めちゃえばいい。そしたら」

トン、と、最後に優しく額を突いて、兄の指が離れる。

「もう心はおまえ自身のものだよ。どうにもならない恋に死にたくなることもない」

「今も、別に死にたくは……」

小さく唇を尖らせて反論すると、デューク兄さまは「そう？」と笑った。私をまっすぐに見る自分と同じ藤色。その瞳を見ていると、まるで鏡を通して自分自身を客観的に見ているようで、少しずつ冷静な思考が戻ってくる気がした。

「思い出なんて、捨てちゃいな」

デューク兄さまの声に私はこくりと頷く。そして、この恋に希望を抱くことを諦めた。バーニーが私を愛することはないという、拒絶してきた事実が、ゆっくりと腑に落ちていった。

それから数日の間、私たち兄妹は湖畔の別荘で過ごした。

「ニーナ、おいで」

朝、身支度を整えて寝室から階下へと下りると、デューク兄さまに散歩に誘われる。カーラー王国は年間を通して気温の変化が少ない国だ。とりわけ今の季節、春は特に暑くもなく寒くもなく過ごしやすい。開かれた扉をくぐって外に出ると風が前髪を持ち上げて通り抜けていった。

湖畔はぐるりと一周できるように、木板を並べた歩道が整備されている。私はデューク兄さまに続いて歩道に足を踏み出した。靴裏に感じる木の感触。ずっと部屋にこもっていたから土や草の

匂いも風の温度も、なんだか新鮮に思える。湖畔を見ながらゆつくりと歩くと、久々に呼吸が深くなっていく。

朝の陽がきらきらと湖面に反射していて、それは何度も見た光景のはずなのに、まるで今日生まれたばかりの景色のように美しい。朝の光がそうさせるのか、この恋を手放す決心をした私の心がそうさせるのかはわからないけれど。

「あんまりよ見してたら転ぶよ」

湖に目を奪われている私の手を取って、デューク兄さまが立ち止まる。その手がとてもあたたかくて、少しだけ子どもの頃を思い出した。嵐の中に放り出されたように寄る辺なく海をさまよっている気がしていたけれど、私は家族や心配してくれる人たちとちゃんと繋がっていて、決して一人ではないのだ。

「デューク兄さま」

「ん？」

「私は、バーニーの婚約者じゃなくなっても私なんですね」

私が言うと、デューク兄さまは笑って、呆れたように肩をすくめた。

「当たり前じゃん」

当たり前。そう、当たり前前すぎて忘れていたことを思い出す。いつの間にか、振り向いてくれないバーニーを追うことに夢中になって、他に何も見えなくなっていたのだ。

散歩から戻った私たちは朝食の席についた。それもまた昨日とは変わりのないものはずなのに、

窓から差し込む陽に透ける紅茶が宝石のように透明で美しいということに改めて気が付く。湯気を立てる水面にミルクを流し込むと、とろりとあたたかな色に濁る。その変化すらどこか楽しい。

ミルクティーで体を温めていると、目の前にきれいな焼き色のパンが積まれた籠が置かれた。ふわりと立ち上る香りにつられるように、私は籠に手を伸ばす。バーニーに別れを告げられてから食欲というものを忘れてしまっていたのだが、自分の意志でパンを手にした。

向かいに座って、私の口に放り込もうとパンをちぎっていたデューク兄さまが手を止めて目を丸くする。昨日はああして無理やり食べさせられたのだ。容赦がない。

パンは焼き立てで、割ると小麦の香りの湯気が立った。私は驚いて声を上げる。

「あたたかい……」

朝食としては遅い時間だったので、とつくに冷めていると思っただけ。

「そりゃ、おまえのために焼いているからね」

デューク兄さまは言っていて、ちぎっていたパンを自分の口に放り込む。私は無意識に目を閉じて、味わって咀嚼した。

ささやかな変化はその日の夕食にも表れた。

「湖で獲れるマスです。新鮮で、身も肉厚で、最高なんです」

朝の私の様子が厨房にも伝わったのか、メインを運んできたのは給仕ではなく屋敷から同行してくれた料理人のベンだった。テーブルに料理を置きながらベンが言う。

皿にはふつくと焼き上げられたマスのソテーがのっている。昨晚まではスープを空にするのが

精一杯だったが、バターの香りに引き寄せられるように、きれいなピンク色の身にナイフを入れた。「おいしい……！」

五感は大だ。どれだけ悲しみに沈んでいても、美しい景色が、優しい声が、頭を撫でる心地よい手の温度が、食欲をそそる香りが、そしておいしい食事が、心に開いた傷口を癒やしてくれる。感嘆の声を上げると、ベンは嬉しそうに笑みを浮かべた。

ピクニックだと言ったのに、デューク兄さまに私をどこかへ連れ出す気配はない。ただ、日に何時間か湖畔に張り出したテラスに誘い、ときにはゆっくりと散歩をしながら、バーニーを思い出して涙する私に何も言わず付き合ってくれた。そして時々、まるで幼子にするように、宝石に触れるような慎重な手つきで髪を撫でてくれる。

何もせず、しかし部屋にこもるのではなく自然を眺めて過ごす日々は、少しずつだが着実に私の心を癒やしていった。しかし王都のタウンハウスに戻ったのち――

「一週間も滞在するなんて聞いてないぞ！」

「言つてなかった？」

「デューク！ またお前は……！」

期間を告げずに私を連れ出していたデューク兄さまは、父と長兄からこっぴどく叱られることになったのだった。



湖畔の別荘から戻り、スプルス家との婚約が正式に解消されたと聞いた。

頭ではわかっていても、やっぱりまた少し泣いてしまったけれど、デューク兄さまと家を出る前に比べたら随分落ち着いたと思う。

「腹立たしいことだが……もしもニーナが望むなら、無礼は水に流して婚約を継続させようとも思った。だが」

苦々しく言葉を紡いでいた父が、話を止めてぎりと奥歯を鳴らす。

「グリーン侯爵め、息子かわいさに婚約解消を認めてほしいと抜かしよった！」

父がテーブルに拳を落とす。ドン！ と鈍い音が談話室の空気を震わせた。

「それほど、バーニーは私と結婚したくないのですね」

「ニーナ……！」

ため息をつきながら溢すと、母が隣からぎゅっと抱きしめてくれた。

こんなことになってしまったが、もとはと言えばこの婚約はスプルス家から持ち込まれたものだ。バーニーは跡継ぎ息子で、私には兄が二人いる。歴史あるウイスタリア家と縁続きになることはグリーン侯爵たつての希望だったのだ。

我が家の家風は質実剛健。生活は華美に飾らず、領民を第一に考えるべしとされてきた。そのた

め農地は豊かで民は飢えることなく、十分な報酬を受けられる騎士団は安定した武力を誇る。

しかしそれゆえに、由緒正しい家柄の割に社交界では地味な立ち位置だ。縁談が山と持ち込まれるというわけではない。高位貴族としては狙いやすい家門と言えるだろう。当代グリーン侯爵は野心の強いタイプに見えたが、息子には甘かったということか。

「ニーナにもっと良い縁が必ずあるわ」

そう言つて、母は抱きしめる力を強くする。その向こうで長兄のデイン兄さまも頷いている。「慰謝料は目一杯ふんだくつてやる」

言葉は少ないが、兄なりに励まそうという気持ちが感じられた。

別荘から戻つて変わったことと言えば、私とバーニーが正式に婚約者ではなくなったということ以外にもうひとつあった。マドリン・セラドーンが毎日のようにウイスタリア家を訪れるようになったことだ。

訪問理由は「セラドーン家から夫人にお手紙を預かっただけですわ!」だったり、「教授からカリキュラムの変更を伝えるように頼まれてしまいましたの」だったり様々だが、用事を済ませてさつさと帰るということはなかった。

「ありがとう、マドリン様。お茶をいかがですか?」

「いただきますわ!」

そわそわした様子のマドリン様を誘つてみると、即座に了承の言葉が返ってくる。本人は決し

て私の様子を見に来たとは言わないのだが、本当の訪問理由は明白だった。

「顔色がとても良くなりましたよ」

マドリン様がどこか弾んだ声で言う。声には安心が滲んでいるのにツンと澄ましてお茶を飲む仕草を見ていると、じんわりとあたたかな気持ちになる。

「ねえ、マドリン様。バーニー……いえ、スプルス様はどうしているかしら」

私は彼女を信頼して、ずっと聞きたかったことを思い切つて口にした。

「知りませんわね、あんな愚か者のことは」

マドリン様はそつげなく言うど、ふいっと顔を背けてしまう。その様子はもう、知っているけど言いたくないと白状しているも同じことなのだが。

「聞いてどうしますの?」

顔を背けたまま、目だけをちろりとこちらに向けてマドリン様が訊ねる。

「傷付きたいのかもしれないせん。傷付いて……早く捨ててしまいたいのかも」

私は正直に答えた。バーニーのことが気になるのは本当だ。だけどそれは、彼がこの婚約解消を後悔してはいないだろうかという希望とは少し違う気がした。

婚約という枷から解放されたバーニーが、愛する人と新しい道を歩き始めていることは明白だ。

彼が学園でどんな様子なのか、誰と一緒に過ごしているのか、手が届かない現実を知つてきちんと諦めたいという気持ちに近い。デューク兄さまと決めた、毎日ちよつとずつ捨てていく恋の一部だ。

自虐的だと取れなくもない言葉にマドリン様は戸惑いながらこちらを窺い、私の表情を見て

自棄<sup>やけ</sup>を起こしているわけではないと判断したのか、ため息をつきながら告げる。

「――毎日、恋人と一緒に登校していますわ。スプルース家の馬車で」

その言葉に、足先から冷たい水の中へと沈んでいくような感覚を覚えた。

学園で過ごしてきた一年ほどの間に、バーニーが私を迎えに来てくれたことはなかった。家同士で定めた婚約とはそんなものだと言いついて聞かせて、私たちの関係に不穏なものはないのだと思おうとした。だけど心の底ではずっと欲しかったのだ。バーニーから向けられる愛情が。

その感情はついに私に向けられることはなく、そしてバーニーは私以外に見つけてしまったのだ。毎日迎えに行くほどの情熱を捧げられる相手を。

恋を捨てるのは痛みを伴う。だけど、うずくまってじっと耐える鈍い痛みより、つらいけれど鋭い痛みの方がいつか癒えるのだと思うことができる。

言葉を失ったままマドリン様を見れば、逸らされていた顔がこちらに向けられていた。眉が下がりが、どこか泣きそうにも見える。

「おかしなことを聞いてしまって、ごめんなさい」

困らせてしまったことを反省しながら告げると、マドリン様はぐっと唇を引き結んで、いつものようにキュッと目を吊り上げた。

「本当におかしなことですわ!」

怒ったようにそう言い、それから、声を小さくして続ける。

「けど、今ここで涙を流すのはおかしなことではないと思いますわ」

私は小さく笑い声を漏らした後、不器用な優しさに甘えてひと筋の涙を流した。悲しみにぶつかるたびに、周囲の優しさに救われる。婚約者とあなたたかな関係を作ることではできなかったけれど、不幸なことばかりではないのだと、そう思うことができるようになっていた。

「私、明日から学園に通いますわ」

夕食の席で告げると、家族一同が目を丸くして手を止めた。ちなみにデューク兄さまはもうウイスタリア家にいない。随分と強引に休暇を取っていたらしく、別荘から戻るやいなや勤め先の王宮に連れ戻されていったのだ。

そして私は家族やマドリン様の愛情に支えられるうちに、いつまでも心配を掛けるのはどうかという気になった。ゆえの、学園復帰宣言である。

「無理はしなくていいのよ」

「お前の成績ならばらく休んでも問題ない」

「そうだと、ニーナ」

母も兄も、そして父も労ってくれる。ふふ、と小さく笑って私は言い切った。

「きつと大丈夫、マドリン様も味方なもの」

家族は「ニーナがまた笑ってくれた」と沸いた。それを見てさらに笑みが溢れた。

バーニーを見るのは、まだ怖い。

冷たく突き放されたときのことや、みつともなく縋り付いてしまった無様な自分を思い返すのは

しんどいし、未婚の令嬢として格落ちした感は否めない。何より、失恋の傷口がまた開くことがつらい。それでも、前に進まなくては。家族のためにも。

その晩、ベッドに入ると窓をコツコツと叩く音がした。恐る恐るカーテンの隙間から覗くと、ぼんやりと銀色に輝く小鳥がガラスの向こうの夜空に浮かんでいる。

「メッセージバード！」

窓を開けるのを待ちわびて小鳥が飛び込んでくる。キラキラと光の粒子を振り撒きながら小鳥は私の頭上を旋回して、肩にとまった。そっと手を伸ばすと指に飛び移る。かわいい。つぶらな瞳と目を合わせるように正面から覗くと小首を傾げてこちらを見た。

『ニーナ クソヤローニ ガツント カマシテコイヨ』

かわいい小鳥からとんでもない暴言が飛び出す。メッセージバードは伝言用の魔法仕掛けの小鳥。送り主の心当たりは一人だけ。

「デューク兄さま……」

下の兄は王宮魔法師なのだ。高度な上級魔法を惜しげもなく無駄遣いしている。小鳥はしばらくどうでもいい愚痴や軽口を振り撒くと、フワリと消えた。

「ありがとう、兄さま」

いつの間にか、明日への恐怖は消えていた。



見慣れた学園の前。少し緊張して馬車を降りる。

学園を休んで三週間ほど。昨晩は家族の励ましがあってしっかり眠れた。ボロボロだった頃に比べたら休み前のコンディションに戻っているはずだ。少なくとも、外見的には。

「ニーナ様！」

一歩を踏み出すのを戸惑っていると、凜と澄んだ声が響いた。

「マドリン様」

タイミングが良すぎる。もしかして、もしかしなくても、私が登校して来るのを待っていてくれたのだろうか。ツンとした表情が、今ではただかわいいものにしが見えない。

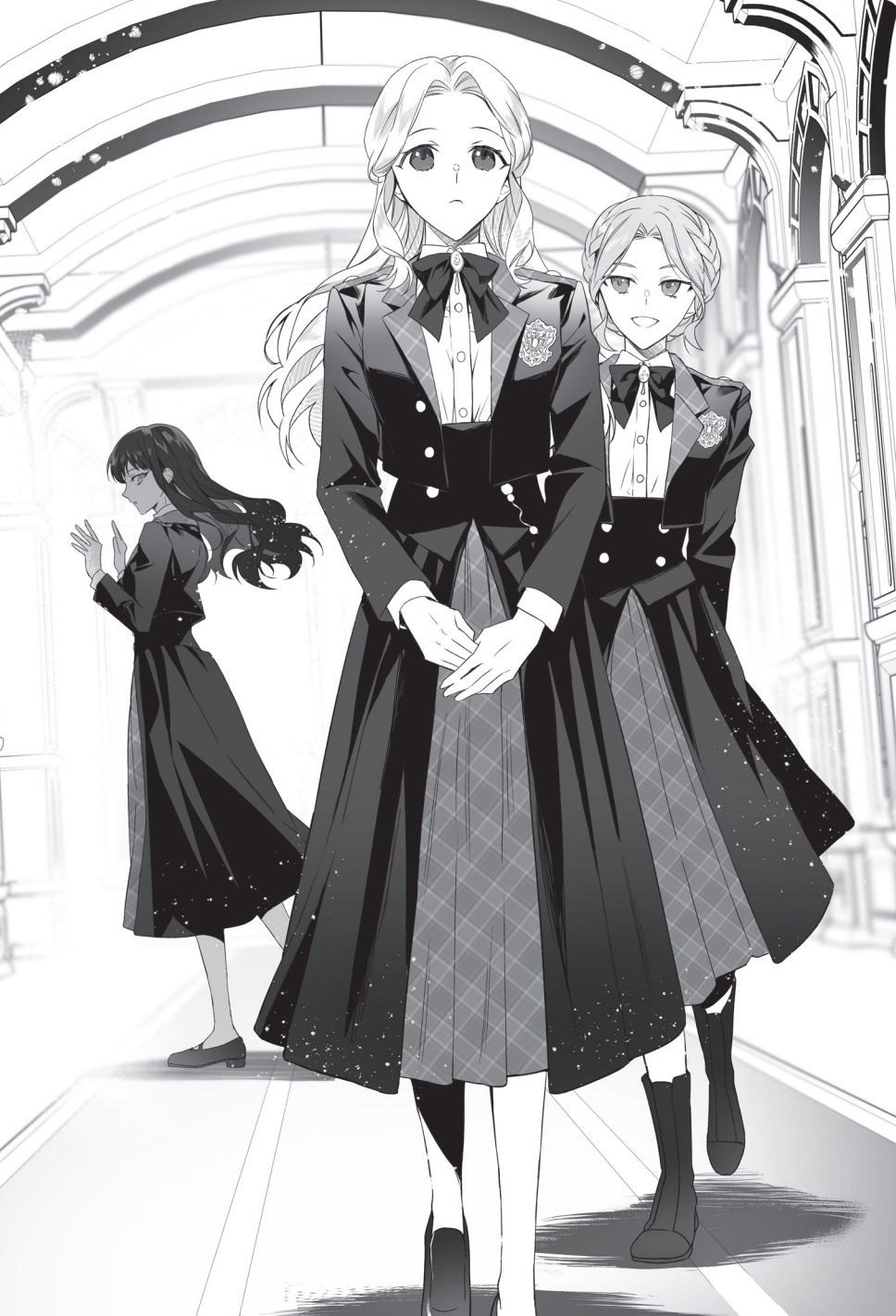
「ありがとうございます、マドリン様」

あたたかな気持ちのまま微笑んでお礼をすると、マドリン様が吊り気味の目をぱちりと丸くした。かわいい。

「ニーナ様が傷付くことはないですわ。相手は羽虫ですもの」

「はむし」

照れ隠しのように顔を背けて、マドリン様と言う。やはり口が悪い。デューク兄さまと気が合いそう……だけど一緒にしてはいけない気もする。



「あの……！ ウィスタリア様……！」

マドリン様と並んで廊下を歩いていると、唐突に、一人の女生徒が飛び出してきた。祈るように手を胸元で組み合わせ、泣きそうに潤んだ目を向けてくる。

うねる艶やかな黒髪に鳶色の瞳、そして真つ赤な唇。記憶にないがとても美しい女性だ。どこかで知り合ったのだろうか？ はて、と首を捻るとさりと銀糸が肩に流れた。ゆっくり休んだおかげで髪も戻っている。

マドリン様の知り合いかしらと隣を見れば、威嚇する猫のようにキュッと目を吊り上げて女生徒を睨んでいる。

「ごきげんよう？」

とりあえず、場を和ませたほうが良いのかしらと、ふわりと微笑んで挨拶を試みる。と、なぜか隣のマドリン様も、向かいの女生徒も、周囲にいた生徒たちまでがポカンと口を開けて時を止めた。ザワザワとただならぬ気配に、ますます首を傾げる。何だろう、この空気。

「えっと……？ ご用がないのでしたら、その、失礼しますわね？」

哑然としたまま微妙に斜めになった姿勢で固まる女生徒の隣を、ペコリと会釈して通り過ぎる。

何だったのかしら。彼女、すごく不思議な体勢だったわ。体幹が強いよね。

「やるわね！ ニーナ様！」

後ろから追いついてきたマドリン様が興奮気味に言う。

「何のこと？」

「うふふ、ちよつとスツキリしたわ」

「あら、それは良かった」

何のことはわからないが、マドリン様が好きそうなのでまあ良いかと流すことにした。

無事に教室に着いて、ざわめくクラスメイトに軽く挨拶をしながら席に着く。好奇の目に晒されるのは承知の上だ。バーニーに会わずに済んだだけでも良しとしよう。どうせそのうち、嫌でも見掛けることになるだろうけれど。

このときの私は、ただかつての婚約者と顔を合わせずに済んだことに感謝していた。——のだ、けれど。

それから私が、バーニーの姿を学園で見ることが一度もなかった。

私とバーニーが王立学園に入学したのは一年前、十六歳のときだ。婚約してからお互いの家を訪問したり一緒に出掛けたりすることはあったが、入学すれば毎日会える。同じ学園で過ごせる時間を、私は密かに楽しみにしていたのだ。

学園のクラス分けに法則性はなく、平民の生徒も高位貴族も同じ教室で同じカリキュラムを受ける。バーニーと私は違うクラスに振り分けられたが、入学してしばらくは穏やかな、婚約者同士らしい時間が続いていた。

待ち合わせてランチタイムを一緒に過ごし、授業後には互いの馬車に別れる前に、短いながらも会う時間を作った。休日には出掛ける約束をしたし、試験前には図書館にも誘った。けれど学園に

入学して半年ほど経った頃から、バーニーと過ごす時間は格段に少なくなった。

「クラスメイトから誘われてるんだ」

何度かそう言って断られるうちに、いつしか昼食は別々にとるのが常となった。食堂では男女間わずクラスメイトに囲まれるバーニーの姿を、よく遠くから見ただけだ。

休日も、帰宅前の時間も、いつしか私との時間ではなくなっていた。だけど同じ学園にいる限り、会う時間は減っても、バーニーの存在はいつも視界のどこかにはあったのだ。

なのに、婚約解消を経て学園に復帰してから彼の姿をまったく見ない。

「バーニー」

授業を終えて廊下に出たところで、誰かがその名を呼ぶ声が聞こえて、思わず一瞬足が止まる。けれど、視線で追ったその先に予想した人物の姿はなかった。

バーニーだってニーナだってよくある名前のひとつだ。私はほっと息を吐いて移動先の教室へと歩き出した。顔を合わせずに済んだことに安堵する自分に少し笑ってしまう。婚約解消をするまではあんなにその姿を探していたというのに。

「ニーナ様」

歩き出した先の廊下にはマドリン様心配そうな表情を浮かべて立っている。一緒に行くために待っていてくれたのだろうか。復帰したばかりの私を気遣ってくれているのを感じて、私の頬は自然とほころんだ。

「マドリン様、次の言語学は隣で受けてもいいかしら？ 予習はしてきたのだけど、休んでいた

間の授業内容が少し不安なの。あの教授はすぐにテキストから脱線するから」

隣に並びながらそう言うと、マドリン様はきよんとした後に笑い出した。

「もちろんよ！」

早く行きましよう、うながすように背に添えられる手が優しい。周囲の生徒が少しざわめいているのは、いつも澄ましているマドリン様が珍しく笑っているからなのかしら。美人は注目されて大変ねと呑気に思った。

もうバーニーを追わなくていい。それは思っていたよりずっと気楽な学園生活だった。

「ニーナ様、帰る前にさっきの講義で発表したレポートを見せていただけなにかしら。素晴らしかったから参考にしたいのだけど、メモを取りそこねた部分があったのよ」

「ええ、もちろん」

講義が終わると、マドリン様から声を掛けられた。私はどこか弾んだ声で答える。これまでは少しでもバーニーと過ごせないかと淡い期待を抱きながら、足早に彼がいる教室へ向かっていた。これからは存在を気にすることなく好きな場所で過ごしていいのだと思うと、慣れた学園生活も新鮮に感じる。

「あつ、ニーナ様……！」

隣を歩くマドリン様に気を取られていたら、慌てたように手を引かれる。

「ありがとうございます」

マドリン様にお礼を言いつつ正面を向くが、そこには誰もいない。てっきり正面から歩いてきた生徒とぶつかりそうになったのかと思っただが。私は小さく首を傾げながら通り過ぎる。何だったのかしらとマドリン様を見ると、私の視線に気付いてにこりと微笑む。

「中庭のカフェテリアに行きましょう、ニーナ様」

「え、ええ」

なんとなく押し切られて中庭へと向かった。大きな白いパラソルの設けられたテラス席を確保する。そのまま講義についてあれこれ話しながら空を流れていく雲を眺めていたら、些細なことはまあいいかと思えてしまって、結局先程の行動は何だったのか聞けないまま終わってしまった。

そんな風に、覚悟していたよりもずっと穏やかな日々を過ごしていたら、あつという間に復帰して一週間以上が過ぎていた。

「ねえ、マドリン様」

私は秘密を打ち明けるように声を殺して、そつとマドリン様に話し掛ける。あまりにも元婚約者の顔を見ないので、さすがに気になり始めていた。そして、もしかして彼はもう学園にいないのではないかと思いついたのだ。それくらい、バーニーは影すら見せなかった。

ランチタイムの食堂は騒がしく、誰に聞かれる心配もないだろうが、もし私の予想が当たっているなら大きな声で聞くのは気が引ける。

「なんですの？」

声を落とした私のトーンに合わせて、マドリン様もヒソヒソと応える。私は思い切って訊ねた。「バーニー、いえ、スプーン様はもしかして学園を辞めたのかしら」

「は？」

私の問いに、淑女らしからぬ顔でポカンと口を開けてマドリン様は静止してしまった。珍しい顔が見られたわ、などと考えていると、やがて彼女はハッと気を取り直した。そして私の顔をまじまじと眺めてから、ゆっくりと少し離れたテーブルへと視線を向ける。

そこには女生徒が一人座っており、テーブルの上には二人分のランチプレートが置かれていた。連れの方が離席しているのか、それとも華奢に見えて意外と食べるタイプなのか。

「マドリン様？ あの方が何か……あ」

私は訊ねながら気付いた。婚約解消後に初めて登校した日、私に話し掛けてきた女生徒だ。彼女の容姿は華やかで印象的だったから、よく覚えている。

「やっぱりマドリン様のお知り合いですの？ 彼女」

今度こそ、マドリン様の目は驚愕で見開かれた。そんなにおかしなことを聞いた覚えはないのだが、信じられないとも言いたげなその視線に居心地が悪くなる。

「バーナ様、あなた……」

マドリン様が何かを言いかけたタイミングで、女生徒が急にこちらを振り向いた。

「バーニー！ いいの、私は大丈夫！」

そしてなぜか、やけに芝居掛かった口調で虚空を見つめて声を上げる。バーニーと呼んだのが

引つ掛かる。まさに今話題にしていた、かつての婚約者の名前だ。

彼女は何かを追うような仕草でこちらのテーブルにやってきた。反射的にびくりと背筋を伸ばしてしまう。困惑しきってマドリン様を見れば、例の怖い顔をしていて驚く。そんなにこの女生徒とは仲が悪いのだろうか。それならこんな風にやたら絡まれるのは気の毒な気がする。

「あの」

私は思い切って女生徒に声を掛けた。

「失礼ながら、あなたのことを存じ上げなくて。お名前を伺っても？」

何だか拳動のあやしい彼女を刺激しないように、微笑みを浮かべできるだけ優しく訊ねる。彼女は目を丸くして息をのんだ。え？ やっぱり私がおかしいの？ でも知り合いですはないわよね？

「いえ、その、先日から何か私に御用があるのかしらと……特に言いたいことがないのなら、無理に聞く気はないのだけど」

害意はないと伝わるかしら？ 周囲の反応が理解できなすぎて、自分の発言にまったく自信が持てなくなる。マドリン様のためにも穏便に引いてほしいだけなのだ。

困り果てた拳句、私は固まってしまった彼女の背に手を添えて、ゆっくりと座っていたテーブルへ戻るよう誘導した。

「とりあえず、お食事の続きをどうぞ？」

それから自分のいたテーブルへと戻り、食べかけの食事がのったトレイを持ち上げた。

「席を移りましょう？ マドリン様」

マドリン様は慌ててトレイを手にして、後からついてきた。やはり、例の女生徒と絡むのは嫌だったのだろう。

食堂はやけに静まり返っていた。そして不思議なことにとでも注目されている。なぜバーニーが学園にいないのか。なぜバーニーの名を呼ぶ女生徒が絡んでくるのか。なぜそのことを聞いたマドリン様が驚くのか。この、よくわからないやり取りを、周囲がやたら気にしているのはなぜなのか。何もかも、疑問だらけだった。

移動したテーブルで素早く食事を終えたマドリン様は、私が食べ終えるのを待つて即座に席を立つと、「ちょっと来て」と私の手を引いて人気のない中庭にやって来た。

「ニーナ様、落ち着いて聞いて頂戴」

そして、信じられないことを言い出したのだ。

「スプルースについてだけど、普通に学園に通っているわ」

「まあ」

それなら顔を合わせても良さそうなのに。

「それに……さっきも食堂で、あなたに話し掛けていたわよ」

「えっ？」

私は思わずぼかんと口を開けて固まった。先程のマドリン様と立場が逆転した形だ。

「全然気が付かなかったわ！ 無視してしまったみたいで、なんだか気が咎めるわね」

私が返すとマドリン様は言いにくそうに口をもにゅもにゅと動かした。かわいい。

「その、今日だけじゃないのよ。復帰した日に廊下で遭遇したときも新しい恋人にベツタリくつついて来ていたの」

「復帰した日……」

私はその日のことを思い出す。周囲からそれとなく遠巻きにされる中、絡んできた人物といえは。「もしかして、先程の令嬢がバーニー……スプルース様の恋のお相手なの？」

マドリン嬢がコクリと頷く。それで彼女に厳しい顔を向けていたのか。私のことを思い遣ってくれていたことが嬉しい。

「そう、彼女が」

まさか向こうから話し掛けてくるとは想定していなかったせいで、バーニーの恋人だとは思いませんでした。

「でも本人には会っていないけど……」

戸惑いながら言うと、マドリン様がゆっくりと首を左右に振った。

「いいえ、会っているのよ」

「え？」

意味がわからない。

「どういふこと？」

「ニーナ様、おそらくただあなた、スプルースのことが認識できなくなっている」

「なっ……」

「はじめは、ニーナ様があの愚か者を無視しているのかと思って、痛快に感じていたの。だけど今日あなたの話を聞いて、そうじゃなかったと気が付いたわ。ニーナ様には、見えていないし聞こえていないのね。姿も、声も。まるで相手が透明人間になってしまったように」  
そんな馬鹿な。

絶句していると、マドリン様がため息をついて、そっと私の手を取る。

「あまりにづらいことがあると、心を守るためにその出来事に関する記憶を失くすことがあると聞いたことがあるわ。ニーナ様の場合はその変則型かもしれない。見たくないから、相手を認識することを頭が拒んでいる状態じゃないかしら」

マドリン様の声とチャイムの音が、やけに遠くに聞こえた。促されて教室に戻り講義を受けたけれど、まったく頭に入って来なかった。

放課後、マドリン様はわざわざウイスタリア家まで付き添ってくれて、母に私の状態を説明してくれた。申し訳ないと思いつつも、正直なところとても助かった。何せ、自分のことなのに私自身が自分に何が起きているのか、まったくわかっていないからだ。

「まあ……」

マドリン様の話を聞いた母は口元を押さえて息をのんだ。信じろと言うほうが難しいかもしれない。仮に真実だとして、娘がおかしくなってしまったとしたらそれはそれでショックだろう。

婚約解消以来、心配ばかり掛けている。申し訳ない気持ちで母を見れば、その表情は思いもよら

ないものだった。口元を覆っていた手を外した母は、にんまりと笑っていたのだ。

「良かったじゃないの、ニーナ！ あのロクデナシの顔を見ずに済んで！」

思ってたリアクションと、なんか違う。

『アンナ クソヤロー ミエナクナツテモ イイデシヨ』

愛らしく小首を傾げたメッセーじバードが、愛らしさの欠片もない暴言を吐く。

「そりゃ、そうだけど……」

私いため息をついて呟く。マドリン様を見送ってしばらくして、出掛けていた父とディーン兄さまが帰宅した。そして。

母に事情を聞いた二人も母と同じことを言うので、何だか私まで「そうかもしれない」と思い始めていた。そこへデューク兄さまのメッセーじバードだ。

『アエナイホウガ ミレンモナクナツテ イーンジャナイノー』

「またそうやって簡単に言う」

まるで会話しているようだが、メッセーじバードはメッセーじを届けるだけなので、会話ではない一方通行だ。デューク兄さまの予測がとても正確というのもあるが、ただ私が言葉を挟んでいるに過ぎない。

『カンガエスギナンダヨ！ イチイチ！』

「これほんとに一方通行よね？」

『マー サツサトアタラシイアイテ サガシナ』

「新しい相手……」

『エー？ デュークオニーサマクライ ステキナヒト？ ソレハチヨット ムズカシインジャーナイ？』

「いや言っていないから。やつぱり一方通行だわ」

だけどもあ、確かに、冷静に考えればデューク兄さまの言う通りだ。バーニーのことを認識できなくなったのは、私にとつて救いだった。復帰してからの穏やかな日々を振り返ってそう思う。

もちろん、人ひとりを存在ごと認識できなくなっているという事実は衝撃だ。そんな話は聞いたことがないし、この症状がいずれ治るのかも、いつまで続くのかもわからない。ひとつだけ言えることは、そのおかげで私の心は守られていたということだ。

いくら頭で諦めると決めても、バーニーのことを認識できていたら、彼の気配を感じるたびに私は心を乱していただろう。そして実際に自分の目で新しい恋人と過ごす様子を目にしていたら、また新たに傷付いていたはずだ。

「元の関係に戻れないなら……確かに見えない聞こえない状態のほうが都合が良いのかも」

自分の意志ではないところで起こっている現象に戸惑いはあるが、私には、私を大切にしてくれる家族やマドリン様がいる。おかげでバーニーが見えなくなっても大きな問題は起きていないのだ。そう考えるとむしろこの状況に甘えてもいいのではという気がしてきた。

バーニーのいない日々、きつと私は慣れていくだろう。そしてこの恋を完全に忘れた頃には、

彼の姿もまた見えるようになるのかもしれない。

「マドリン様、昨日はありがとう」

翌日、学園でマドリン様に声を掛けると、私の顔を見てわかりやすく表情に安堵を滲ませた。なんだろう、最近マドリン様のツンとした表情を見ていない気がするわ。それはそれで、少し寂しいから不思議だ。

「もしかして、廊下で手を引いてくれたとき、彼がいた……？」

やたら注目されていたのも、やけにマドリン様が心配そうにしていたのも、私の前には認識できないバーニーがいたのかと考えると辻褄が合う。私の問いに、マドリン様が頷いた。

「ええ。でも良かったと思うわ、結果として」

ついにマドリン様まで見えなくてよかったと言い出した。私は思わず笑ってしまう。

「何を笑ってらっしゃるの？ もう！」

そして久々に見たツンとした顔もかわいくて、私はいつまでも笑っていた。



その人に学園で呼び止められたのは、姿の見えない恋に少しずつ慣れ始めた頃だった。

「ニーナ・ウイスタリア嬢」

春の陽にあたためられた木々が瑞々しい緑の香りを立ち上らせる、青空の下。図書館に行くために中庭を突っ切っていた私は、背後から名前を呼ばれて立ち止まった。

声を掛けてきた人物はルビーのような深紅の瞳をして、陽に透ける蜂蜜色の髪を風に泳がせている。絵画から抜け出て来たような姿は非常に眼福だが、問題はその人物の持つ身分だ。

「——っ、殿下……！ ごきげんよう」

声の主はイーサン・バーミリオン王弟殿下。この国、カーラー王国の若き王の、十歳下の弟君だ。学園では私やバーニーのひとつ上、最高学年に在籍する。

「学園の中で堅苦しいのはなしにしよう。イーサンでいいよ」

口元をほんのりと緩めて、殿下はそう言った。眉を下げて苦笑する、微かに憂いを孕んだ表情はとても魅力的——なのだけれど。

「さすがにそれは恐れ多いですわ」

距離を縮めるには警戒心が先立つ。

「それはそうか。妥協しよう。殿下」はそのままでいいから、少しか話したい」

「ええと……」

どうしよう。身分的に大変断りにくいのが、今日は図書館の閉館時間が早い蔵書整理の日だ。閉まってしまいう前に借りていた本を返し、別の本を借りたいのだが。

答えに窮したわずかの間に、殿下が私の手元をチラリと見た。

「歩きながらで構わない」

「はこ」

殿下は何も言わず図書館のほうへ歩き出す。王族なのだから希望を押し通すこともできるのに、あくまでこちらの都合を優先させてくれる姿勢にふわりと心が緩んだ。これまでは挨拶する程度の関係だったのだが、こんなに紳士な方だったとは。

麗らかな陽射しの中、二人並んで芝を踏む。視界が届く範囲には思い思いに放課後を過ごす生徒たちがちらほらと見え、お喋りや笑い声がささやかな喧騒を運んでくる。風が木々を揺らすザワザワとした音や鳥の鳴き声。なかなか声を発しないイーサン殿下の言葉の代わりに、それらに耳を傾けた。

少しの時間のうちに、ようやく殿下がため息を漏らす。

「こんな話を聞かされても君は戸惑うだろうけど……最近、どこを向いても婚約の話が湧いて来ていてね。陛下からも母からも、宰相からも」

陛下というのは言うまでもなくイーサン殿下の兄である国王陛下で、母というのは王太后様だ。

先代の国王が亡くなり殿下の兄が国王として立ったのだけれど、王太后様はご健在なのだ。

「殿下のお立場であれば、まあ……」

「ああ、わかっている。わかっているんだ。仕方がないことなんだけれど」

微かに言い淀む殿下に首を傾げる。その様子を上目に見た殿下が小さく息を吸って、空を見上げた。言葉は続けられる。

「私にも、候補を挙げる余地が欲しい」